EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO えど友

第73号
平成25年
(2013)
5－6

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

堀切に「江戸花菖蒲」のルーツを訪ねる……1～2
学習会「日比谷図書文化館」／第13回定期総会開催 …3
えど友広小路 ……4～5
会員に聞く「秋田市在住で菅江真澄研究に活躍中の小野努さん」／会員からの投稿「私と江戸東京博物館」、「やきとりの思い出」／えど友サークルだより／友の会めも
友の会セミナー「町方書上翻刻版刊行を記念して」……6
友の会セミナー「鞠も落ちねば上がり申さず候」……7
友の会特別観覧会「八重の桜」……8
江戸博クリップ「健康維持の手段」……8
見学会「江戸東京たてもの園見学会」……9
第5回「えど友研究発表会」の発表者を募集します……9
江戸名所図会を歩く…⑦［三縁山増上寺］……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

～お江戸の花競べ～

堀切に「江戸花菖蒲」のルーツを訪ねる

無類の花好きだった家康

徳川家康は『本草綱目』を座右の書とし、二代秀忠、三代家光とともに無類の「花好き」でした。将軍の花好きは、やがて大名、旗本から町人にも伝わり、お江戸はさながら「花競べ」の様相を呈しました。とりわけ江戸中期以降は、瀬戸や有田で植木鉢の量産が始まると、栽培する場所を持たない長屋住まいの庶民も鉢植え作りを楽しんだり、花の名所を訪ねるなど、将軍から庶民にいたるまで江戸中が花に深く関心を持つ世界に類を見ない町に発展していきました。江戸時代に盛んに栽培された花には「椿」「牡丹」「ツツジ」「サクラソウ」「朝顔」「菊」などがありますが、今回は季節がら「花菖蒲」を取り上げてみたいと思います。

号を「菖翁」と称した松平定朝

アヤメ科の多年草、アヤメ、カキツバタ、花菖蒲のうち園芸植物として最も著しい発展を遂げたのが「花菖蒲」です。一代でこれを世界の園芸種に育て上げた人物に松平左金吾定朝(号を菖翁と称す)がいます。定朝は幕臣で2,000石を領し、文政10年(1827)より京都町奉行を長く勤めた後、江戸へ帰任し天保6年(1835)小普請組支配となり翌年官を辞しています。屋敷地は麻布桜田町(現在の港区元麻布3丁目)にあり、父定寛の意思を継いだ菖翁は、日本各地から変わった花色花型の系統を集め、交配を繰り返し、60年にわたって花菖蒲の改良に励みました。

菖翁が花菖蒲の培養の遍歴や自作品種の紹介及び栽培方法を記した『花菖培養録』(嘉永6年・1853)は、

▲堀切菖蒲園

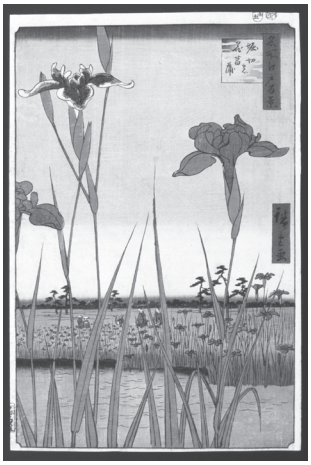
原本写本あわせ10冊が現存し、今でも花菖蒲園芸家のバイブルになっています。品種改良に取り組んだ菖翁にとって一段の飛躍のきっかけになったのが、奥州安積沼産の「ハナカツミ」と称する苗の導入でした。菖翁は京都に赴任後、官舎の庭に花菖蒲の畑を作り、研究に没頭しました。ある時、培養中の品種から秀でた花を選んで仁孝天皇へ献上したところ、ことのほかお喜びになったとのことです。天保(1830～1844)の初めには優れた花は200種を超えましたが、すべてを江戸麻布の地に持ち帰り、さらに改良を重ねました。菖翁が作り上げた傑作に「宇宙」「十二一重」などがあります。こうして江戸で発展した花菖蒲は、「江戸花菖蒲」と呼ばれ、大名から庶民にいたるまで多くの粋人たちに愛され続けました。

「江戸花菖蒲」と堀切の地

葛飾区の堀切は江戸時代より花菖蒲の村として発展しました。菖翁が育んだ花菖蒲と堀切、どこに接点があるのでしょうか。それは堀切村で初めて花菖蒲園「小高園」を開園した小高伊左衛門の存在です。花農家であった伊左衛門は四季の花々を栽培し江戸へ切り花を売りさばくことを生活の糧にしていましたが、ことのほか花菖蒲の栽培に心を尽くしました。伊左衛門は江戸本所に居を構えていた旗本、万年録三郎から花菖蒲の分与を受けましたが、その中に万年が松平菖翁から譲り受けた菖蒲根「宇宙」「十二一重」「霓裳羽衣」

▲宇宙（おおぞら）と十二一重

「立田川」「月下の波」の秘蔵花があり、これをもとに種子をとり実生なども行って、新花の育成に努めました。嘉永初めの頃、十二代将軍徳川家慶が鷹狩で立ち寄った際、尾張藩主徳川斉荘（なりたか）から「小高園」が「日本一菖蒲」であると紹介する親書が贈られています。堀切は水が豊富で、花菖蒲の栽培には最適地であったこと


▲名所江戸百景　堀切の花菖蒲
（郷土と天文の博物館所蔵）

もあって、伊左衛門の「小高園」に続き、「武蔵園」「吉野園」「堀切園」「観花園」など堀切の村には次々と花菖蒲園が開かれていきます。堀切の花菖蒲の賑わいは、広重の「名所江戸百景」にも描かれています。明治維新を迎えると「武蔵園」がドイツへ、「小高園」がアメリカに花菖蒲の株を輸出するなど国際的に発展を見た堀切地域の菖蒲園は、明治末期の東武鉄道、昭和初期の京成電鉄の開通とともに東京郊外の観光名所として不動の地位を築いていきました。

戦時下の廃園と「堀切園」の復興再生

江戸時代から、明治、大正、昭和と全盛を極めた堀切地域の花菖蒲も戦時下では稲作を余儀なくされたため、花菖蒲園はすべて廃園となり、江戸期以来の伝統と繁栄は幕を下ろしました。復興したのは昭和28年(1953)、唯一「堀切園」のみでした。「堀切園」は足立に疎開していた花菖蒲の株や近隣の「小高園」などに残っていた株を田圃に移し、名称を「堀切菖蒲園」と改め営業を再開しました。昭和30年(1955)には東京都の買収計画が進み「東京都堀切菖蒲園」が誕生、後に葛飾区に移管されました。しかし菖蒲園の発祥地としての伝統と誇りを担ってきた「堀切菖蒲園」も、都市化による水質汚染や栽培技術が充分に伝承されていなかった事もあり平成10年(1998)頃には一時困難な時期に直面しました。この危機を先頭に立って乗り越え、見事再生に成功した人が堀切に在住しています。自らを「花菖蒲職人」と称する、滝瀬健太郎さん(82歳)と保田（やすだ）史義さん(78歳)、そして2人の意思を継いで保全に努める黒川幹雄さん(70歳)です。

ご苦労話と意気込みをお聞きしました。

▲堀切の花菖蒲職人の３人

―きっかけと一番のご苦労は？

(滝瀬)区からの依頼でした。菖蒲まつりのときテレビ局から取材に来るのですが、とてもお見せできる状態ではなかったですね。一番の苦労は土壌の改良と株分けの工夫でした。区の職員さんたちも総出で頑張ってくれてありがたかったですね。

(保田)滝瀬さんの指導のもと、ともかく再生のため一心不乱に動きました。3年はかかると思っていましたが、翌年よみがえった時は皆で喜びを分かち合いました。

―地域の人と荒川河川敷に「(通称)第二堀切菖蒲園」を開設したと聞きましたが。

(黒川)まだ緒に就いたばかりですが、良い花を付けています。東京スカイツリーと一緒に楽しめ、好評を頂いています。皆と楽しみながら、江戸の文化を後世に伝えていきたいと思います。

「堀切菖蒲園」と「菖蒲まつり」

「堀切菖蒲園」は、京成本線「堀切菖蒲園駅」から徒歩10分ほどのところにあります。総面積は約7,700m^2、葛飾区公園課が管理しています。現在では、全国にたくさんの花菖蒲園がありますが、「堀切菖蒲園」の魅力は何と言ってもその品種の多さと、古来の伝統ある名花が一堂に見られることにあります。現在栽培されている品種は約200種、6,000株といわれ、その中には松平菖翁の作った「宇宙」をはじめ「小高園」「武蔵園」「堀切園」などが独自に開発した奇花も含まれていて、「江戸花菖蒲」の多様な花形を楽しむことが出来ます。

「堀切菖蒲園」では、毎年6月初めから20日頃まで「葛飾菖蒲まつり」が開かれます。隣を流れる荒川河川敷の「堀切水辺公園」には、地域の「花菖蒲を育てる会」が区と共同で作り上げた「(通称)第二堀切菖蒲園」もあり、昨年完成した「東京スカイツリー」を遠くに見ながらの花菖蒲観賞は格別な楽しみとなっています。浅草や東京スカイツリーを観光された時など、もうひとつ足を延ばされて、いにしえの粋人が心をこめて作り上げた花々に心を寄せ、季節の「花菖蒲」を堪能されてはいかがでしょうか。

【取材】文・写真：広報部会　五十島正修

協力：葛飾区郷土と天文の博物館

参考資料：

・古文書資料集１「堀切と花菖蒲」
　葛飾区郷土と天文の博物館発行
・かつしかブックレット「花菖蒲Ⅱ」
　および「花菖蒲Ⅲ」葛飾区郷土と
　天文の博物館発行
・特別展　堀切菖蒲園―葛西花暦―
　葛飾区郷土と天文の博物館発行
・花と木の文化「花菖蒲」
　星野耕治　著

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成25年2月26日）

日比谷図書文化館を訪ねる

友の会の新企画、学習会の２回目は日比谷図書文化館を訪問しました。

日比谷図書文化館は、日比谷公園の中にあり、もともとは東京都立日比谷図書館の入っている建物でしたが、平成22年(2010)に東京都から千代田区に移管され、翌年に四番町歴史民俗資料館とひとつになり、博物館としての機能も備えた新しい施設となってリニューアルオープンしました。

同館のコンセプトは「読む、調べる、学ぶ、楽しむ、交流する」とのことで学習会では、若林尚夫館長からごあいさつをいただいたあと、泉崎文化財事務室長から同館の施設紹介がありました。「地下１階のカフェから地上４階まで回遊的に楽しんでいただきたい」と、これまでにない図書館と博物館の融合施設としての同館の楽しみ方を詳しく説明していただきました。例えば、地下１階のカフェには，同館で借りた本を持ち込んで楽しむことができますし、３階では美術館、博物館情報の確認ができるとのことで、特別研究室(有料)など館内を利用するうえで大変参考になりました。

続いて、千代田区文化財調査指導員の水本和美さんから、同館で開催されていた特別展「徳川将軍家の器」(３月３日まで)の見どころについての解説がありました。

この特別展は、明暦の大火によって焼失した江戸城の本丸御殿のものと考えられる江戸城跡の発掘資料を展示しています。

水本さんからは、江戸の都市建設の流れと明暦の大火の話、そして今回展示されている出土資料がどのようなものなのかという説明がありました。

水本さんの説明によると、江戸城は、その西側に広がる台地などの地形を活用するとともに大規模な造成工事を経て整備が行われ、寛永13年(1636)頃までに「江戸図屏風」(寛永期の作といわれている)に描かれている姿に完成したそうです。例えば，江戸城北の丸、現在東京国立近代美術館の建っている場所付近では、盛り土による造成が行われたとのことでした。

特に印象的だったのは、明暦の大火以前は徳川御三家のお屋敷も江戸城の敷地内に設けられていたという点です。徳川御三家、例えば尾張藩のお屋敷は現在でいう新宿区市ヶ谷にあったという印象が強かったので、明暦の大火以前はそうではなかったと聞いてなるほどと思いました。

普請に関連しては明暦の大火直前に始まり、大火の半年後に完成した石垣工事があったのですが、その工事現場跡から焼けた瓦が大量に発掘され、大火で出た膨大な量のがれきが石垣の基礎に使われたことが分かったのだそうです。

講義の後は、特別展と常設展を２班に分かれて見学し、参加者は学芸員の方に説明をしていただきながらゆっくり楽しんでいました。

その後自由解散となりましたが、なかには当日事業部会が用意してくださった日比谷図書文化館周辺案内資料を参考に付近を散策された方や図書館に行き勉強された方もいらっしゃったようです。

２階のブースには今回の特別展に関する資料71冊があり、私はさっそくそのうちの１冊をお借りして、自宅でも楽しく勉強させていただきました。

同館は、蔵書約17万冊、閲覧席約300席を数え、平日は午前10時から午後10時まで開館しており、会社帰りの方も利用しやすい施設です。皆さんもぜひお出かけになってはいかがでしょうか。参加者55人。

【記録】文：広報部会・竹中裕見子
写真：同・五十島正修

第13回定期総会開催、多くの皆さんのご出席を！

例年どおり今年も５月に定期総会を開催します。定期総会は会員が一堂に会する年に一度の機会です。そして過去１年の活動を振り返るとともに、本年度の活動について率直な意見交換をする場です。

同封の議案書をご検討いただき、多くの会員の皆さんがご出席くださいますようお待ち申しあげます。

開催要領は次のとおりです。

日時：５月24日(金)14時から
（受付開始は13時15分です）
会場：江戸東京博物館・１階ホール

○竹内館長の記念講演

今年は例年と順序が異なり、総会に先立って江戸博竹内誠館長による記念講演があります。演題は「幕末維新期を生き抜いた女性たち」です。ご期待ください。

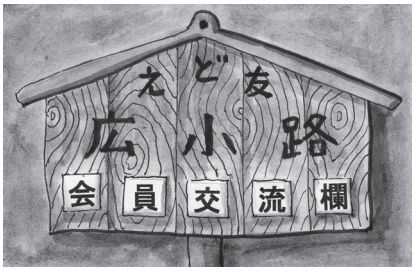
○　平成25年度　友の会定期総会

◇　主な議案

・平成24年度事業報告ならびに収支決算報告について
・平成25年度事業計画案ならびに事業予算案について
・友の会規約の改訂について
・役員および監事の選任について

○会員交流会

総会終了後、17時30分より、７階・桜茶寮にて会員交流会(会費500円)が開催されます。会員同士の交流、懇親を深める良い機会です。ぜひともご参加ください。



会員に聞く

秋田市在住で菅江真澄研究に活躍中の小野努さん

昨年8月末のデータでは東京・埼玉・千葉・神奈川以外にお住まいの会員が96人(全体の6.1%)もおられます。今回はそうした会員の中から、秋田市在住の小野努さんにお話を伺いました。

――入会されたときはこちらにお住まいでしたか。

確か平成19年(2007)2月にさいたま市浦和区に住んでいたときに入会したかと思います。翌年4月に私の故郷である秋田にもどることになり、以来5年になりますが、ずっと友の会会員です。

――それはありがたいことです。お名刺を拝見すると、友の会会員をトップに掲げてくださっていますが。

はい。私は江戸博友の会はその活動、運営、企画力については、常に他の模範・手本であると思っていますので、会員であることを大いに「誇り」にしています。

――ところで、友の会からお送りしている会報『えど友』をはじめとする資料はお役に立っているでしょうか。

地方で民俗、地名などを研究する場合、特に私がいま力を入れている「菅江真澄研究」などでは、歴史、それも常に江戸時代を意識していますので、送付される資料は意識の向上、理解に非常に役立っています。とても感謝しています。

――その「菅江真澄研究」についてお聞かせください。

そうですね。昨年10月4日の毎日新聞の「余録」欄の書き出しに菅江真澄のことが出ています。[江戸時代の旅行家で奥羽や蝦夷地を旅した菅江真澄は秋田の古四王神社に立ち寄って書いている。「むかし古四王の神に灯明の代として寄せられた油田というあたりの坂を雪舟で速くくだった。臭水がわき流れる草生津川を渡って……」▲臭水＝草生津は石油の古名だ。(以下略)]。このあと「余録」は今話題のシェールオイルにと展開していきます。秋田ではこの古四王神社に事務所を置く菅江真澄研究会というのがあり、活発な研究活動が行われています。私もこの会に参加し、学習会の講師を務めたり、会報の編集委員をやったりしています。

▲講演中の小野努さん

――この写真は昨年1月に小野さんが「菅江真澄と道祖神信仰」について講演されたときのものですね。また、同年9月には「菅江真澄が記録した自然災害」についても講演されていますが、そのレジュメを拝見すると実に膨大な資料ですね。

では最後に今後の方向は？

菅江真澄を中心に民俗、庚申、道祖神、地名および小野小町などの研究にいそしんでいきたいと思っています。

【聞き手】文：広報部会・松原良
写真：小野努さん提供

会員からの投稿

私と江戸東京博物館

中尾敦子

東京暮らしを始めて40年近くになるが、現職時代は「江戸」や「東京」について、あまり深く知る機会もなく、たまに興味ある展示会を見に来るくらいで、「江戸博」も他の美術館、博物館と変わらぬ利用状況であった。

退職を機に、「江戸東京博物館友の会」に入り、毎回の展示会は勿論のこと、内覧会や古文書、各種カルチャー、友の会主催の行事にもできる限り参加するようになり、今では「両国」はすっかりおなじみの町となった。講座の後、7階の図書館で関連資料に目を通したり、「常設展」をのぞくのも楽しみであるし、春の陽気のいい時節には船にも乗って隅田川下りを楽しんだりしている。

「江戸博」は広報活動が行き届いていると思う。NEWSレターも、各種カルチャー案内も実に良くできているし親しみやすい。また、実際の講座は大変内容豊かで楽しい。開館20周年を迎え、年間100万人以上もの人が利用しているというのもうなずける。近松先生のお話など独特のペーソスが効いていて本当に魅力的であった。

これからも、いろいろな先生方の興味深いお話を聞き、貴重な展示品にもじかに触れ、「江戸・東京」に関する理解を一層深め、より豊かな人生を送りたい。そして、東京暮らしの特権を十二分に満喫したいと思う。

やきとりの思い出

佐藤幸彦

過日テレビで、国技館の地下に広いやきとり工場が有ることが紹介されていました。そう言えば、相撲見物とやきとりは切り離せないものです。太平洋戦争開戦の直前頃、升席に招待してくれる人があり、観戦に行きました。小学生の頃です。その頃は制限時間が10分なので飲食でもしないと見る方も間が持てないのでした。そのかわり飲食に気を取られていると時間いっぱいで観衆がワーッと盛り上がり、勝負は瞬時に決まって、その勝負を見落としてし

まうこともあり、落ちつかないものでした。戦争のため食料にぜいたくはいえなくなっていましたが、おいしいタレのやきとりとソラマメの塩ゆでで、大人はビールを飲み、子供はサイダーを飲んでいました。やきとりは、この世にこんなおいしいものがあって大人たちは子供の知らないところでいつも食べているのだろうか、と不思議に思ったものです。

近頃、居酒屋に行くと誰かが注文して、やきとりを食べることになり、昔はやきとりに感動したものだ、などと不思議に思うのですが、考えてみると、確かに昔の方がおいしかったのです。それは全部が霞網で捕った小鳥焼きなのでした。小鳥焼きではツグミが最高なのだそうですが、私は食べたことがありません。すべてスズメです。スズメは稲に群がる「害鳥」なので、千葉や茨城の穀倉地帯では農家が霞網を仕掛けてスズメを捕り、毛をむしって東京の焼き鳥屋に納入していました。スズメは上手に焼いて甘口のタレをかければ、頭もガリガリ食べられて今のやきとりよりも数段おいしかったと記憶します。霞網猟は無差別の大量捕獲なので、禁止されたのですが、スズメだけは害鳥として捕ることを大目に見られていたのかもしれません。霞網にかかった鳥は網が絡まって逃げられず、そのパニックで死んでしまいます。

敗戦直後、向かいの家の大学生がこっそり庭に霞網を仕掛けていて、そこに時々フクロウの赤ちゃんがかかりましたが、全部死んでいました。昭和20年代には八王子付近の京王線沿線の丘陵で鳥を焼いて食べさせる店がありました。大きい鳥はウズラでしたが霞網の密猟をしているのか、小鳥を炉端で焼いて食べた思い出があります。国技館の主食？　焼き鳥は、四つ足(四つん這い)でない、ゲン(験)を担いだメニューであろうと思います。

えど友サークルだより

◆江戸東京を巡る会：2月10日(日)「江戸の町　堀と川跡歴史の足跡(その3)」として、八丁堀から鉄砲洲川、築地川、三十間堀川、外濠川跡などを巡った。参加者42人。

◆落語と講談を楽しむ会：2月23日(土)江戸博1階ホールで第百回記念の「落語・講談まつり」を開催した。第1部はメンバーによる講演とパネルディスカッション、第2部はメンバーのほか、応援、招待出演(女流講談師・宝井琴柑さん)も加えた

▲パネルディスカッションの様子

演芸実演で、参加・入場者は約140人と盛況。ロビーでは扇子、手拭、色紙などお宝のミニ展示も行われた。

3月23日(土)江戸博開館20周年記念の落語公演に参加、柳家さん喬の「唐茄子屋政談」、柳家花緑の「文七元結」と人情噺をたっぷり味わった。参加者16人。

◆藩史研究会：2月8日(金)安倍良男さんが「出羽山形藩」の研究発表を行った。ご自身が出羽庄内出身だけに熱い思いが感じられた。参加者は18人。3月8日(金)小林弘明さんが「那須党－那須諸藩と交代寄合那須衆－」と題して研究発表を行った。豊富な資料と詳細な説明で一同納得だった。参加者18人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：2月14日(木)、3月14日(木)、29日(金)に例会を開催。参加者は各8、7、6人。

◆『江戸名所図会』輪読会：2月21日(木)舩津恭子さんの担当で妙法山法華寺～致航山満願寺について読み、現地散策の提案もあった。参加者19人。3月21日(木)中村貞子さんの担当で赤坂御門から鳳閣密寺までについて詳細な説明があり、意見交換をした。参加者20人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会：2月10日(日)に第1回の会合が行われ、世話人の松原良さんから会の主旨、運営の具体的方法などについて説明が行われた。参加者73人。

＊　　＊　　＊　　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名を記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

友の会めも(開催日と人数)

平成25年2月～3月

◆役員会2月12日(火)15人。3月12日(火)13人。◆事業部会2月5日(火)19人。3月5日(火)21人。◆広報部会2月19日(火)13人。3月19日(火)15人。◆総務部会2月26日(火)15人。4月2日(火)15人。◆役員等候補者推薦委員会2月12日(火)11人。◆三部会合同会議2月12日(火)36人。◆町方書上翻刻プロジェクト2月7日(木)A7人、B10人。2月21日(木)A8人、B9人。3月7日(木)A7人、B9人。3月21日(木)A8人、B10人。◆常設展見学会3月26日(火)45人。◆古文書講座　入門編2月6日(水)午前56人・午後42人。3月13日(水)午前73人、午後54人。初級編2月20日(水)午前40人・午後52人。3月27日(水)午前51人・午後38人。中級編2月16日(土)午前40人・午後26人。3月16日(土)午前40人・午後24人。

第126回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年2月24日）

「町方書上翻刻版刊行を記念して」

「町方書上」の魅力

講師　市川寛明さん
（江戸博学芸員）

「町方書上」は江戸東京の歴史地誌研究の基本史料、旧家の分析資料、松本四郎氏の『日本近世都市論』の店借率の研究のデータとしての成果などからその史料的価値は古くから知られていました。その膨大な量から部分的な翻刻刊行しかありませんでした。今回「町方書上」全巻が翻刻され刊行されることによって新しい視点からの江戸東京の地域研究が本格的に進むことを期待したいと思います。

江戸という町について

家康が町割のもとに作った江戸は、幕府から武家、寺社、町人への拝領地（幕府からの貸し与えられた土地）が基本で、沽券（こけん）地（私有地）は例外的なものだったと考えられています。しかし、17世紀後半を通じて、江戸が急速に発展すると、拝領地が解体し、賃貸、相対替を名目にした売買などにより町人地化が進展し、やがて事実上の沽券地（公役負担あり）となっていきました。

人口の急増で周辺部に向けた拡大も起こり、百姓地を武家屋敷として購入し百姓に代わって年貢・諸役を負担する抱（かかえ）屋敷（売買の制限あり）が増加し、都市化する中で町並屋敷（売買自由、年貢は代官、人別は町奉行）が増加し、正徳3年（1713）町並地の設定が行われ、江戸周辺の259町が町奉行支配の内に編入されました。朱引と墨引の間に町並地の設定がされていることがわかります。

「中之郷町方書上」を読む

本所中之郷原庭町の項を読むと「水戸佐倉街道ニ而・・・百姓商売家取立罷在候ニ付、町並御年貢上納仕」「堅川通江新道出来・・・所之者困窮ニ付…江戸町人其外之者江相対売仕候」と江戸郊外の町の都市化の段階的過程を読み取ることができます。その他町内の地名の由来、家総数（家持、店借別）、自身番屋、旧家由来書など興味ある事柄の記載もあります。次の本所中之郷竹町の項では「竹町の渡し」「前栽市場」の由来の過程についての興味ある記載がありますので読んでみてください。

レポーターからひとこと

江戸の町の由来、発展の過程が生き生きと書かれていることに驚きました。全巻が翻刻されることによって新しい違った江戸の発見に出合えることを楽しみにしています。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

本所・深川の研究と町方書上

講師　髙山慶子さん
（宇都宮大学教育学部准教授）

私が江戸の研究を進める際、『町方書上』をどう利用し、何がわかったかについてお話します。

深川熊井町名主の由緒書

深川猟師町（現門前仲町近辺）は、熊井町や相川町を含む八つの町から成り立っています。『町方書上』には各町の基本情報とともに、旧家の由緒書等も載っています。それによると「熊井町名主理左衛門の先祖は紀州（和歌山県）出身で、本家の次男が江戸へ出てきた。当初、酒井雅楽頭の屋敷に逗留していたが、寛永六年に深川猟師町を開発し、名主となった」とあります。

猟師町に移住した漁師は摂津（大阪府）出身とされていましたから、漁師と開発人とは出身が違うことを考えさせた史料でした。

深川相川町名主の由緒書

熊井町の隣の相川町の名主相川家には、由緒書に相当する「系譜」が残されています。室町幕府管領家を祖として開発人相川親兵衛に至る歴史を記した長文の記録ですが、『町方書上』には収録されていません。名主の由緒書でも『町方書上』に掲載されたものとされなかったものがあったことがわかります。

なお、この「系譜」と相川家の「系図」より、相川家は土佐（高知県）出身であることがわかり、猟師町の開発人はさまざまな地域から江戸に出てきた人たちであったと考えられます。

本所

本所は明暦の大火後に開発された地域。『町方書上』には善兵衛屋敷の南を流れる小川について「本所深川堺ニ付俗ニ堺川と唱候」とあります。本所と深川の境界は竪川ではなく、竪川の南に位置する小川にあり、本所は竪川を抱く地域だったことが知られます。

また「前菜物市場」成立の由来が『町方書上』に見られ、竪川沿いの町として本所では舟運と関係の深い生業が多く営まれていたと考えられます。

明暦の大火

10万人の死者を出したとも伝わる明暦3年（1657）の大火。この火災の際、小伝馬町牢屋の囚人が解き放され、鎮火後は浅草の善慶寺へ集まるように命じられたとされます。この一件に関して、『町方書上』により、囚人たちは最終的に浅草の三十三間堂へ収容されたことが確認されました。

このように江戸の歴史を知る上で、「友の会」が翻刻した『町方書上』は大変貴重なものです。

レポーターからひとこと

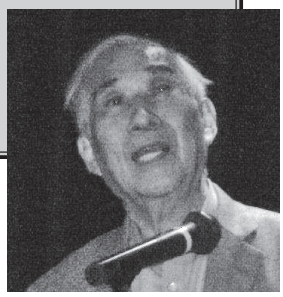
江戸時代に生きていた人が、リアルタイムで書き残した史料は、信憑性（しんぴょうせい）に難があるものであっても、視点を変えれば立派な史料になり得ることを学びました。参加者96人。

【記録】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・佐藤美代子

第127回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年3月9日）

「鞠も落ちねば上がり申さず候（源内、江戸を駆ける！）」

講師　小中陽太郎さん（作家）



デラシネ源内の不屈の精神

平賀源内は享保13年(1728)、高松藩志度浦の御蔵番の家に生まれた下級武士でした。源内は生涯身分制度に悩み、身分の隔ての無い江戸の庶民性が気にいっていました。誰もが一緒に橋を渡っていく両国橋を「世の諺にも、朝より夕まで両国橋の上に、槍の三筋たゆる事なしといへるは、常の事なんめり」と平賀風で描写しています。源内は『根南志具佐』という戯作を書いていますが、「根なし草」のことをフランス語ではデラシネといい故郷喪失者を指します。私が『翔べよ 源内』を書いたのは、ふるさと讃岐を捨て、高松藩から放逐され、まさにデラシネの生き方をした源内の姿に深く共感をしたことが執筆動機です。

人生の転機　仕官御構い

幼くして神童と呼ばれ、25歳で長崎留学を果たし、29歳にして江戸へ出て、湯島聖堂に寄宿します。学んだ学問は本草学や鉱物学で、これが問題になりました。というのも、博物学を大いに好んだ藩主松平頼恭に気に入られ、源内は酷使されることになったからです。ついに源内は、「恐れながら御暇ちょうだい仕り、我儘に一出精仕りたく存じ奉り候」と辞職願を出しますが、ありがたくも許可されたものの「ただし、他への仕官の儀は御構い遊ばされ候」と他家への仕官は許さぬと条件がついたのです。源内が受けた仕官御構いのダメージについては、さまざまな見方があります。「源内にしてみれば、幕府を背景とし、全国を舞台として活躍したいといふ年来の夢を、しかも実現の一歩手前にある夢を封じられたのである」と暉峻康隆は身分制度の犠牲者と見ます。一方、芳賀徹は、それほど痛手ではなかったとし、「『＜仕官御構事件＞による失意の結果、科学者平賀源内が突如として風刺作家風来人』に転じたとまで断言する勇敢な論者も、かつては存在した」といいます。源内は、徳川幕府体制の世の中で、溜間詰大名の許を離れ、仕官御構いというレッテルをはられ「侍」としてのアイデンティティを失いました。しかし、彼は負けることなく、物産会を主催、斬新なアイディアを次々と出し大成功します。そして、江戸に戯作や浄瑠璃を持ちこみ、「文運東漸」の尖兵となりました。源内は、仕官していては得られぬ自由を手にしたのです。

非常の人

その後、鉱山開発に失敗すると、2度目の長崎留学を果たし、そこで、源内は阿蘭陀の実学に多大な影響を受けます。日本最初の西洋画ともいわれる、源内の油絵「西洋婦人図」には、当時日本で「ベロ」とよばれた「プルシアン(ベルリン)ブルー」が用いられています。源内には才能だけではなく、先見の明がありました。

源内は、本草学、物産学、発明工夫、戯作、浄瑠璃を自家薬籠中のものにしつつ、工人や細工職人など後輩を育てる教育者でもありました。秋田蘭画を興した秋田藩の絵師小田野直武の指導もしています。田舎から江戸に出て、たちまち歓楽の巷に飲み込まれた直武を源内は諭します。源内は勝手なことをいいながら、ある種の倫理観を持っていた人でもありました。目が覚めた直武は精進し、やがて、杉田玄白で知られる『解体新書』の挿絵と解剖図を描くまでになります。一方、源内は、愛弟子のみごとな成果を見て、おのれの至らなさに憂鬱になります。そこで、一気に『放屁論』で憂さをはらすのです。「主人という贅もなく、知行という飯粒が足の裏にひっ付かず、行きたき所を駆けめぐり、いやな所は茶にしてしまう。せめてに一生、我が体を自由にするがもうけなり」と。

そして源内は長崎から持ち帰ったエレキテルを修復し、それを見世物にして大儲けします。が、それもつかの間、山師扱いされ、失意のうちに、些細な事から少年に斬りつけ小伝馬町の牢獄に収容されてしまいます。そこで破傷風にかかり一生を終えるのです。

まさに生は実存、死は不条理です。親友、杉田玄白が墓碑銘を書き、あの有名な一節が記されます。「非常ノ人、非常ノ事ヲ好ミ、行ヒ是レ非常　何ゾ非常ニ死スルヤ」

平賀源内の自由な精神に自分の似姿を見いだし、その自由で不屈な生き方を書いた次第です。

レポーターからひとこと

小中先生の講談調の切れ味のよいお話は大変楽しいものでした。源内の多岐に渡る人生は、著書『翔べよ源内』(平原社)でさらに深く味わえます。講座タイトルの「鞠も・・・」の意味も310ページで分かります。参加者165人。

【記録】文：広報部会・深尾恵美子
写真：同・内匠屋京子

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成25年3月15日）

江戸東京博物館 開館20周年記念
2013年NHK大河ドラマ特別展
「八重の桜」

3月15日17時よりホールにて特別展「八重の桜」の友の会特別観覧会があり、担当の齋藤慎一学芸員より見どころ解説がありました。

今年のドラマは、主人公福島（会津藩）出身の新島八重の生涯を復興（若松城落城という戦災からの復興）をテーマに描こうとしていますが、ドラマの内容をNHKに教えてもらえず、どういう構成にするか苦心したそうです。でも、ドラマの初回と展覧会第1章の作りが酷似していたことで、復興をテーマに掲げた時考えることは同じだと感激したとのことです。

第1章「会津の教え」

藩祖保科正之が定めた「家訓」は松平容保が書いたものです。八重が7歳のときには暗唱していたという『日新館童子訓』上下、暗記のために破損したのか八重が持っていた本の展示は下巻だけです。

第2章「幕末の京都」

京都守護職となった容保が内密に孝明天皇からいただいた「御宸翰」「御製」、折りたたんだ跡は錦袋に入れて生涯にわたり片時も離さず持っていたことを物語ります。明治になって政府が高額な条件を提示しましたが決して手放しませんでした。

第3章「会津籠城」

会津での戦いの資料とともに会津藩の降伏式で使われた緋毛氈。旧藩士たちがこの日の悔しさを忘れないよう式後小さく切り取って持ち帰り後日「泣血氈」と呼ばれました。

第4章「古都復興」

兄覚馬が明治3年（1870）に京都市に登用されたことにより、八重たちも京都にやってきました。新島襄と知り合い、明治9年（1876）結婚しています。八重の作った花の手芸品の裏には英語で名前を何度も書き入れてあります。アメリカコロニアル・スタイルの新島邸が再現され、襄と八重の結婚生活を垣間見ることができます。

第5章「ハンサムウーマンへ」

明治23年（1890）に襄が病気で死去、八重は進んで社会貢献に寄与していきます。

「日本赤十字社社員証」「篤志看護婦人会帽子」「茶道許状」「茶号授与書（茶号宗竹）」や感謝の手紙、勲章が八重への高い評価を示しています。

昭和3年（1928）旧会津藩出身者に朗報が入ります。松平容保の息子恒雄の長女節子（成婚後勢津子）と昭和天皇の弟秩父宮雍仁親王とのご成婚です。これにより会津の朝敵の汚名が晴れたと八重も感じ、何首も和歌を詠じ、揮毫しています。

その年の京都会津会秋季例会の写真を見ていると八重（83歳）の晴れ晴れとした表情と「千代ふともいろもかわらぬ若松の木のしたかげに遊ぶむれつる」の歌に会津への郷土愛と絆を感じました。

参加者は123人。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子

江戸博クリップ

「健康維持の手段」

都市歴史研究室　奥山路栄

私の趣味はクラシックバレエです。今年でン10年目を迎えます。

年数だけ言ってしまうと、何か凄い技の一つも出来そうな気がしますが、なにせ大人になってからの習い事。そんな状態でもなく、とりあえず続けている感じです。

「何故大人になってから始めたの?」とよく聞かれるのですが、もともとはバレエを始めるつもりではなかったのです。ヒップホップダンスを習うつもりでした。

ヒップホップを始めようとダンススクールに行った時のこと。たまたまやっていた、クラシックバレエのレッスンを目にしたのがきっかけでした。あっという間に先生の動きの美しさに魅了され、気づいたらバレエクラスの入会手続きをしている自分がいました。

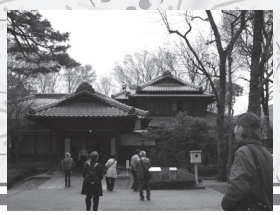
その後中断しつつもしぶとく続けてこられたのは、やはりバレエが好きだったからなのだろうな、と思います。

ピアノの音色に合わせて体を動かしているうちに、日常の悩みもどこか遠くに吹き飛んでいくような気がしますし、疲れていても多少無理して動いた方が、結果的にスッキリしたりもします。

こうして考えてみると、私にとってバレエは、健康を維持する手段なのかもしれません。

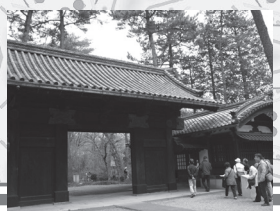
せっかくここまで続けてきたのだから、これからもぼちぼち続けていければなぁ、などと思う今日このごろです。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。



江戸東京博物館友の会　見学会　（平成25年3月24日）

「江戸東京たてもの園見学会」



江戸博の分館に当たる「江戸東京たてもの園」は、本館同様本年開園20周年を迎えました。今回は20周年記念イベントを開催中の同園を訪れ、建物の見学とさまざまなイベントを楽しみました。参加者は55人。

当日は朝からどんよりとした曇り空で、たてもの園のある小金井公園の桜は満開ですが、花見客の姿はほとんどありません。改札を通ったエントランス広場では、ボランティアガイドの方々が来園者を笑顔で出迎え、親切に案内を行っています。

まず西ゾーンの山の手通りを進んでいくと、新しく姿を現したのが復元間近(4/20公開予定)のデ・ラランデ邸で、赤い屋根が印象的です。その向かいには三井八郎右衛門邸があり、玄関前では本日催される茶会の受付をしています。建物内ではさまざまな文様が目を引き、3階にある太い梁からは頑丈な作りが見て取れます。

さらに先に進むと綱島家と吉野家の2軒の農家があります。どちらも

▲農家綱島家土間を通過

火のある囲炉裏端に人々が車座になり、ガイドさんの説明に子供たちが身を乗り出して聞き入っています。近くの八王子千人同心組頭の家ではパネルの説明に参加者が熱心に見入っていました。

今度は武蔵野の道を歩いてセンターゾーンに向かいます。旧自証院霊屋の裏手を進んで行くと高橋是清邸の前に出ます。建物に入ると二・二六事件の展示室や是清の暗殺された部屋があり、昭和史のひとこまを見る思いです。また、向かいの林にはムラサキハナナが群生しており、まるで紫の絨毯のようです。近くには旧宇和島藩伊達家の門が堂々とした

▲武蔵野の道

姿を見せています。一見すると江戸時代の大名家の門ですが、建てられたのが大正時代とは驚きです。

東ゾーンに入ってすぐの天明家(農家)の縁側には風車が飾ってあり、ガイドさんが作り方を教えてくれますが、対象は子供だけだそうです。

たくさんの商店が建ち並ぶ下町中通りは大勢の家族連れでにぎわって

▲鍵屋（居酒屋）

います。居酒屋の鍵屋は実際に営業することもあるのですが、残念ながら本日はなし。それでも壁に貼ってあるメニューから話の輪が広がり、参加者同士大いに盛り上がっていました。また、唐破風の見事な子宝湯では若い人や子供たちが湯船に入って(お湯は入っていませんが)感触を楽しんでいました。

子宝湯の前で見学会は解散となり、参加者はめいめいお気に入りの建物を見て回ったり、B級グルメやジャズコンサートを楽しんだりしていました。心配された天気も午後には回復し、春爛漫の1日を過ごすことができました。

レポーターからひとこと

何度も訪れているたてもの園ですが、来るたびに新しい発見があります。今回の参加者はやや少なめでしたが、多くの人に魅力を知ってほしいと思います。

【記録】文：広報部会・菊池真一
写真：同・竹中裕見子

第5回「えど友研究発表会」の発表者を募集します

ご好評をいただいております「えど友研究発表会」を今年度も行います。

発表会の主旨は、長年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答・討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料等のお支払いはいたしません。今回も3テーマを予定し、1テーマにつき質疑応答を含め1時間程度の予定です。

発表会は8月6日(火)の13時30分から江戸博1階ホールで開催の予定です。日頃の成果発表に奮ってご応募くださるよう発表者を募集します。

発表を希望する方は、はがきに「発表会応募」と明記し、氏名、会員番号、電話番号、テーマを書いて事務局宛お送りください。なお、昨年応募されて発表に至らなかった方で再度応募される場合も改めてお申し出ください。

折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りしますので、所要事項をご記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって正式の応募といたします。応募締切りは5月末です。

なお、応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果については6月上旬に応募者にご連絡いたします。

江戸名所図会を歩く…⑦

［三縁山増上寺］

台徳院霊廟惣門

増上寺は江戸名所図会のなかでも破格の扱いで取り上げられています。16ページ余りの内、８ページもの挿絵で増上寺の寺域が描かれ、記述の約半分は「広度院と号す。関東浄家の総本寺十八壇林の冠首にして盛大の佛域たり」で始まる増上寺の歴史と、開山酉誉上人、中興開山の観智國師、そして東照大神君にあてられています。

増上寺の山内寺院、学寮を含めた寺域は現在の住居表示でいう港区芝公園１丁目から４丁目にわたる広大なものでした。徳川家霊廟のあった場所はいま某ホテルの敷地や公園となり、増上寺境内は図会の頃の３分の１以下になって、伽藍の配置もずいぶん変わってしまっています。梅の花がほころび始めた２月下旬に訪れました。

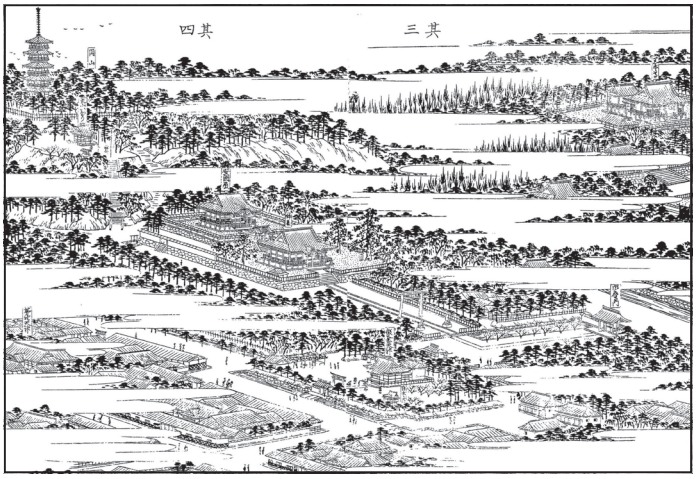
大門から安国殿

「東に向かう当山の惣門なり。外に下馬札を建てらる」とある大門から先が増上寺の寺域でした。三解脱門を目指してまっすぐ行く途中に今も花岳院、常照院、源興院など昔の塔頭が残っています。三解脱門は増上寺の中門にあたり、江戸初期に造営された当時の面影を残す唯一の建造物です。今は非公開の２階内部に釈迦三尊像と十六羅漢像が安置されていますが、図会の頃は年に数回の登楼が許されていました。

三門を入った右手にある鐘楼堂は戦後の再建ですが、納められている大梵鐘は延宝元年(1673)に７回の鋳造を経て完成したといわれるもので「その声洪大にして遠く百里に聞こゆ」とあります。東京タワーを背景にした大本堂の右手には安国殿があります。安国殿は家康公の法名で、元々は家康公の尊像を祀る御霊屋を意味します。図会の挿絵でも境内の南に描かれており、本堂の後には黒本尊を安置した黒本尊堂と呼ばれるお堂も見えます。黒本尊は家康の念持仏で出陣の際は戦勝を祈願してともに戦場に赴いたと伝えられたため、勝運黒本尊として徳川家ばかりでなく人々の信仰を得ていました。黒本尊は昭和49年(1974)に本堂右隣に移され、建物が安国殿と命名されました。

徳川将軍家墓所から丸山

安国殿裏には徳川家墓所があり、図会の頃とは比べものにならない敷地に６人の将軍とその家族が葬られています。正面の門は旧国宝で、文昭院(六代家宣)霊廟の宝塔前にあった中門を移築した鋳抜門です。青銅製の扉は所々白っぽく変色して、無残な感じがします。墓所の手前に、４体の菩薩像がおかれていますが、何となくほっこりとしたこの菩薩たちは私のお気に入り。墓所から東京タワー方面へ抜け、通りに出て左に曲がると赤羽橋手前に弁天池があります。「赤羽門の内、蓮池の中島にあり。中島を芙蓉州と号く」とある辨財天社と別当の宝珠院は今も残っていますが、広大な蓮池と中島は願うべくもありません。おまけに公園内はリニューアル工事中で至って殺風景になっていました。普段は公園の中を抜けて丸山まで行けるのですが、この日は公園を大きく迂回することになりました。丸山の頂上にはなぜか伊能忠敬測地偉功表という石碑が建っていて、南東へ少し下ると芝丸山古墳の石標と、説明板、そして随身稲荷があります。このあたりは台徳院(二代秀忠)の御霊屋の敷地であったため図会には細かい記述がありませんが、挿絵を見ると台徳院宝塔の脇に建っていた五重塔は描かれています。(挿絵　左上隅)



▲長谷川雪旦　増上寺（部分）

東照宮から経蔵

ほころび始めた梅の木が数本、小さな梅園を抜けると東照宮です。家康公が生前に作らせた寿像がご神体として祀られています。元は安国殿で図会にも「本堂構えの外、南の方にあり。四月十七日は御祭礼にて参拝を許さるる故に、詣する人多し」とありますが、明治の神仏分離令で芝東照宮となりました。東照宮前の公園から日比谷通りに出て左折すると台徳院霊廟惣門が見えてきます。復元された朱塗りの入母屋造八脚門は簡素ですが、堂々としています。さらに三門寄りに行き、元方丈の表門であった黒門から境内に戻ると左手に土蔵造り、白壁の経蔵があります。内部には赤い漆で塗られた八角形の輪蔵がありますが「ここに納むる所の一代蔵経は宋版にして其先、豆州修善寺にありて平政子の寄付なりとぞ」とされた大蔵経は、今は別に保管されています。

熊野三所権現祠から御成門

経蔵から本堂の前を横切り、鐘楼の脇を抜けると増上寺の鎮守である熊野三所権現祠があります。日比谷通りに戻って御成門交差点へ向かう途中、ホテルの敷地内に有章院(七代家継)霊廟二天門が、さらに交差点を左に回ると将軍の参詣に使われた御成門があります。二天門は元の場所にそのままありますが、御成門は交差点付近にあったのが移築されました。どちらの門も台徳院の惣門と違い、はげ落ちた漆など放置された様がありありで、何とかならないものかという思いがわいてきます。

【取材】歩いた人(文・写真)：
広報部会・中村貞子

催事案内

古文書講座

5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教／最近の研究テーマ：近世における服飾制度・江戸幕府御用絵師・近世における書跡史・近世における有職故実学)
- 開催日：5/1(水)、6/5(水)、7/3(水)

◆初級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻／最近の研究テーマ：幕藩関係・また、江戸幕府の行政機構について)
- 開催日：5/22(水)、6/19(水)、7/17(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻／最近のテーマ：近世後期政治史、特に近世後期の朝廷と幕府の関係について)
- 開催日：5/18(土)、6/15(土)、7/20(土)

- 時間：午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時00分～16時00分
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

開館20周年を祝し記念品を贈呈

－1階ホールのロビーに置時計－

江戸博の開館20周年を祝して、友の会から江戸博に記念品を贈ることとなりました。品物は15周年のときと同様置時計で、1階ホールのロビーに設置されました。時計の右側面には「寄贈　開館二十周年記念　江戸東京博物館友の会　平成二十五年三月二十八日」と記されています。

友の会セミナー

第129回「江戸城内の行事と儀礼」

講師　深井雅海さん(聖心女子大学文学部教授)

◆江戸城「表」は幕府の政務を行う場所であり、さまざまな儀式を執り行う場所でもありました。その中でも諸大名が登城する年中行事にはどんなものがあり、どのように執り行われたのか。しかも、その時の殿席、礼式、着用する装束などもこと細かに決められていました。そしてこれら殿中儀礼には幕府の深い思惑が秘められていました。年中行事の中からいくつかの具体例を挙げながらお話していただきます。

◆講師略歴：ふかい・まさうみ

昭和23年(1948)広島生まれ。昭和46年(1971)国学院大学文学部卒業。博士(歴史学)。専門は江戸の幕府政治に関する研究。現在徳川林政史研究所副所長と聖心女子大学文学部教授を兼務。著書に『江戸城御庭番』『図解江戸城をよむ』『江戸城』など。共編著も多数。

- 開催日時：5月17日(金)14時～15時30分
- 申込締切：5月9日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第130回「永代橋崩落事故から見えてくるもの」

講師　桐原総一さん(日本エコミュージアム研究会員)

◆文化4年(1807)8月19日、江戸市中を揺るがす大事件が発生します。それが深川の富岡八幡の祭礼当日に発生した永代橋崩落事故です。死者行方不明者が2,000人にのぼる大事故といわれています。絵図や目撃者等の古記録などによってこの事故の様子が分かります。しかしさまざまな説があり確かな崩落原因は不明です。本講演を通し崩落原因を考え、自分なりの【橋ものがたり】を作るためのきっかけにしてください。

◆講師略歴：きりはら・そういち

昭和51年(1976)国学院大学史学科卒業。千葉県の小学校教員を経て、現在日本エコミュージアム研究会に所属し、博物館学の立場で、景観保全や町づくりへの支援を行っています。また大阪府藤井市井真成市民研究会に参加し、平成16年(2004)10月に中国西安郊外で発見された墓誌に銘記された遣唐使「井真成(せいしんせい)」の故郷探しを行っています。

著書：『学校博物館百景』崙書房、共著『遣唐使井真成の墓誌』ミネルバ書房。趣味：油絵、サックス。

- 開催日時：6月22日(土)14時～15時30分
- 申込締切：6月13日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館 20 周年記念特別展
「ファインバーグ･コレクション展　江戸絵画の奇跡」

◆アメリカ・メリーランド州にあるファインバーグ・コレクションは化学者であり実業家でもあったロバート・ファインバーグ氏が一代で蒐集した、江戸絵画を中心とする日本美術のコレクションです。本展は、江戸時代の民間画派の、自由で活気に満ちた肉筆画の作品が中心のこのコレクションを日本で初めてまとまった形で紹介する展覧会で、百花繚乱の江戸絵画の世界を楽しむことができます。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：5月31日(金)17時～19時
- 申込締切：5月20日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

●江戸東京博物館 開館20周年記念
2013年NHK大河ドラマ特別展
「八重の桜」

会期残りわずか、お見逃しなく！

会　期　3月12日(火)～5月6日(月･祝)
休館日：毎週月曜日(ただし4月29日、5月6日は開館)。
会　員：一般650円、65歳以上320円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展
「ファインバーグ･コレクション展 江戸絵画の奇跡」

会　期　5月21日(火)～7月15日(月･祝)
休館日：毎週月曜日　ただし7月15日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●企画展
「盛り場･両国ー江戸庶民の行動文化ー」

会　期　4月16日(火)～5月26日(日)
休館日：5月7日(火)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●次回企画展
「発掘された日本列島2013」

会　期　6月8日(土)～7月25日(木)
休館日：毎週月曜日　　ただし7月15日(月･祝)は開館、7月16日(火)は休館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

町方書上翻刻版刊行記念パーティー

2月24日(日)の友の会セミナー「町方書上翻刻版刊行を記念して」の終了後、江戸博7階の桜茶寮で記念パーティーが開催されました。竹内誠館長はじめ、市川寛明・髙山慶子両先生にもご出席いただき、翻刻版刊行を祝い、なごやかな雰囲気のなかで懇談しました。参加者は翻刻担当者など26人。

会報＜**えど友**＞第 73 号
平成 25 年 5 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、前田太門、五十島正修、菊池真一、竹中裕見子、岡本脩、田端道宏、光田憲雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910